

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 「花より団子」とツツジの花見

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 新之輔 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001638">https://doi.org/10.57529/00001638</a>

# 「花より団子」とツツジの花見

## The Proverb “Dumplings Before Flowers” and Viewing of the Azaleas

伊藤新之輔

キーワード：花より団子 花見 ツツジ 卯月八日 死者供養

关键词：舍华求实(舍花取团子) 赏花 杜鹃花 卯月八日 供奉死者

### 要旨

この論文は、俳諧や狂歌、かるた、ことわざ辞典類や解説本、卯月八日習俗から「花より団子」の用例とその特徴を示し、ツツジの花見観から「花より団子」の意味するところを再考したものである。これは、従来のことわざ辞典類で示されてきたサクラの花見観による「花より団子」理解に対してのものである。

俳諧や狂歌の整理からは、「花より団子」という成句が1600年代には民間に定着したこと、句や歌にはツツジが詠まれたものが多くあり、卯月八日にこの成句が伝わっていたことを示した。

一方で、江戸東京で刊行されたいろはかるたやことわざ辞典類、解説本ではサクラの花見観による「花より団子」理解が行われ、この理解が次第に定着していったことを指摘した。

さらに、卯月八日の民俗事象から、近畿地方とその周辺の地域では「花より団子」が「〈何のために卯月八日に立てるのかわからない花よりも食べることのできる団子のほうがいい〉とは言うけれど、どちらも大切なことなのだからしっかり取り組まなければならない」という意味で使われていることを明らかにした。卯月八日習俗では、「花より団子」が戒めの意味を含みながら、花(ツツジ)と団子(死者霊や月への供物)をどちらも大切にしている。このツツジの花見観による「花より団子」理解は、花と団子に優劣をつけるサクラの花見観による「花より団子」理解とは大きく異なるものであり、俳諧等の理解にも有効であることを示した。

### 摘要

与以往从谚语词典所示的赏樱花来考察“舍华求实(舍花取团子)”的先行研究相比,本文侧重于以俳谐、狂歌、花牌、谚语词典以及解说书为素材,通过整理卯月八日的习俗,从赏杜鹃花的视角,考察“舍华求实(舍花取团子)”用例和特征。

通过分析俳谐和狂歌可知,“舍华求实(舍花取团子)”这一表述于十七世纪时逐渐成形并固化,而在此过程中,俳句与和歌中多包涵杜鹃花以及其与卯月八日配对成句的流传。与此相对,在江户发行的花牌、谚语词典以及解说书则将“舍华求实(舍花取团子)”理解为出自于赏樱花。

論文通过考察卯月八日の民俗现象而得出结论，在近畿及其周边地区，“舍华求实（舍花取团子）”的意思是，虽说“与不知由来的花相比，可以食用的团子更好，但两者都重要”。这是根据卯月八日，花（杜鹃花）和团子（供奉品）同等重要的习俗由来的观点。然而，这种以赏杜鹃花为基准的“舍华求实（舍花取团子）”的理解和赏樱花的理解则大为不同，而前者更有助于理解俳谐等相关内容。

## はじめに

暦の上では夏を迎え、いよいよ若葉が青々と繁り始める頃、ツツジの花は盛りを迎え、赤や紅、白など様々に山野を色づかせる。桜の花見に比べると楽しむ人の少ないツツジの花見だが、全国各地の街路樹や公園には多くのツツジが植えられ、日本人には身近な植物でもある。こうした花見の折に「花より団子」という言葉が発せられる。この成句の意味を『小学館 ことわざを知る辞典』では次のように説明している。

花を見て楽しむよりも団子を食べる方がよい。見た目や品位よりも実質や実利を重視することのたとえ。また、風流を解さないことのたとえ<sup>(1)</sup>。

この辞典では、それぞれのことわざについて詳細を述べており、花より団子の「花」を「春にお花見をする桜の花」、「団子」を花見のときに食べる団子だと説明している。また、「花」は風流・外観を重んじる立場、「団子」は実利・実益を重んじる立場を表した比喩であるとも述べている。こうしたことわざのイメージは桜の花の下で三色団子を食べている光景としてかたる等で図像化され様々な場面で用いられている<sup>(2)</sup>。多くの辞典類で説明されている「花より団子」の解釈は以上と同様であり、その意味は広く定着しているといえる。しかし、そもそも花見というのはサクラに限らないのであり、行楽行事としてのサクラの花見観のみでこの成句を説明することが適切なであろうか。

小川直之は「花より団子」の心意<sup>(3)</sup>で「花より団子」の古い例として『新撰犬筑波集』や『犬子集』の俳諧を挙げ、「花より団子」の花はツツジであるとし、ツツジと団子の関係性、花よりも団子のほうがいいという心意について考察している。小川は『諸国風俗問状』の答から卯月八日の事例を挙げ、「花よりも団子とたれか岩つつじ」（『新撰犬筑波集』）のイワツツジは祖霊や新仏の依代、「たれか」とは迎える先祖あるいは新仏と解することができるかと結論づけた。

小川による「花より団子」理解の見直しは、民俗学的な視点によって言語学に

よる成句の説明に疑義を呈した点で大きな功績があるが、卯月八日の具体的な伝承から「花より団子」を説明するまでは至っていない。本稿では、「花より団子」が初期俳諧や狂歌でどのように詠みこまれていたかを示し、その特徴を明らかにする。さらに、いろはかるた類やことわざ辞典類によって「花より団子」がどのようにイメージされ、説明されてきたかを整理する。そして、これらを踏まえた上で、卯月八日に「花より団子」という成句を伝承している事例から、「花より団子」の意味するところをツツジの花見観から再考することとする。

## 1、俳諧・狂歌にみえる「花より団子」

俳諧や狂歌は庶民によって親しまれ、庶民生活の様子が詠み込まれている。それらにみえる「花より団子」について整理を行う。【表1】はこれらを年代順に一覧にしたもので、卯月八日の語が見られるものに◎印を付した。作者等の各項目は判明している事項のみ抽出した。

表1 「花より団子」の俳諧・狂歌

卯月八日	成立年/記述年	収録誌名	作者	俳諧/狂歌	花	団子
	～1539	『新撰犬筑波集』		花よりもだんごとたれかいはつ、じ	ツツジ	
	1613	『寒川入道筆記』		花よりも団子の京トなりにけりけふもいしいしあすもいしいし	足利将軍家	織田信長
	1628	『醒睡笑』		花よりもだごの京とそ成にけりけふもいしいしあすもいしいし	足利将軍家	織田信長
	1633	『犬子集』	貞徳	花よりも団子やありて帰腐		
				花よりも実こそほしけれ桜鯛	サクラ	
			春可	花よりや下戸の目につくもちつ、じ	ツツジ	
			親重	だんごよりましたる花かもちつ、じ	ツツジ	
				花よりやくふてよしの、葛だんご		吉野の葛団子
	1636	『貞徳百首狂歌』	貞徳	花よりもくすたんこをや思ふらんよしの、おくにあさる山賤	サクラ	吉野の葛団子
	1644写	『かさね草紙』	前野との	世の中は花よりたこと聞なれば歌に餅はいやまさりけり		
	1649?	『吾吟我集』	石田未徳	仏にも彼岸桜の花よりは団子とおもふたむけなるへし	彼岸桜	彼岸団子
	1660	『新続犬筑波集』	如貞	たむくるや花より納受せんたんこ		千団子

卯月 八日	成立年/ 記述年	収録誌名	作者	俳諧/狂歌	花	団子
	1666	『古今夷曲集』	昌治	花よりも団子を数の題ならばくはず と腹にあちはいつへし		
	1688～ 1703	『大団』	黒田月洞軒	この比は歌もいはでのつ、じもち花 より何より暮をあんじ見て	ツツジ	
◎	1740	『狂歌活玉集』	可因	卯月八日花より団子と申事は喰ふに 出るのいはれなるらん		
	1476序	『狂歌秋の花』		花よりも団子といへは一しほに賞玩 すへき秋の望月		月見団子
				春霞たつを見捨て御入滅の釈迦は花 より団子と悟つた		涅槃団子
◎	1753	『朋ちから』	末中	花よりもたんこよりまたよい物を給 はりけりな卯月やうかん		
	1756	『興太郎』	鈍永	名にめて、賞翫せいや餅つ、し花より 団子といふからはなを	ツツジ	
			鈍全翁	くらへ来し花に団子は白雲の月社の ほれいも見ざるまに		月見団子
			義直	ほつとりの当世風味は花よりも日本 一のきみ団子なり		
	1770	『狂歌気のくすり』	稲士	花よりも団子といえと弁当も入相の 鐘もわずれてぞ見る		
◎	1778	『狂歌やまと拾遺』	田中其翁	花つみに尻をひねれはたんこほとは れて卯月の八日なりけり		
	1783	『狂歌若菜集』		下戸ならぬこそ男なれ山桜とか団 子を花に替えき	サクラ	花見団子
	1785	『徳和哥後万載集』		花よりは団子ちいさく見えにけり小 米さくらもあたえ千金	サクラ	
◎	1797	『狂歌栗葉集』	可翠	産湯しやの花の団子のせわしかろ釈 迦御誕生まやふにんにて		
◎	1812	『狂歌浦の見わたし』	本丸	八か日の花はまたきに家毎にさくら はこちのとはな高うする		
◎	1819	『狂歌新後三栗集』	呉郷	仏ても喰はねはた、ぬ世なりとや花 より団子まさるとはいふ		

## (1) 俳諧

まず、初期俳諧においてどのように「花より団子」が詠み込まれていたのかを確認する。

俳書の嚆矢とされる山崎宗鑑の『新撰犬筑波集』（1539年以前成立）には「花よりもだんごとたれかいはつ、じ」の句が採録されている<sup>(4)</sup>。これは文献にみえる「花より団子」の最も古い例で、花としてツツジが詠みこまれている。

宗鑑による『犬筑波集』、荒木田守武による『守武千句』（1540年）以降、約百年

間の戦国期を経て『犬子集』(1633年)が松江重頼によって刊行される。ここでは多くの「花より団子」の用例が見受けられる<sup>(5)</sup>。その全てを挙げると、「花よりも団子やありて帰鷹」(貞徳、307番)、「花よりも実こそほしけれ桜鯛」(508番、新独吟集所収兼載独吟百韻の発句)、「花よりや下戸の目につくもちつゝじ」(春可、537番)、「だんごよりましたる花かもちつゝじ」(親重、538番)、「花よりやくふてよしのゝ葛だんご」(1022番)、「花よりもたいせつなるは妻ならし」に対して「春にちぎりて団子くふ中」(1800番)と返しているものも確認できる。ここでは、「花より団子」が風流よりも実益が大切だという意味で用いられる一方、親重の句によれば、団子より「餅」の字を冠するモチツツジのほうが優れているという。洒落てはいるが、決して花が劣っていると捉えられていたわけではないことがわかる。

なお、皆虚による『せわ焼草』(1656年)には季語などの俳語が集成されており、「花より団子」が採録されている<sup>(6)</sup>。また、北村季吟の『新続犬筑波集』第十四(1660年)には、如貞が「たむくるや花より納受せんたんこ」(3423番)と詠んでいる<sup>(7)</sup>。「三井のきしもにまうて侍りて」と詞書があることから、これは滋賀県大津市園城寺(三井寺)の鬼子母神に供える千団子と納受せんを掛けて詠んだものだといえる。

これ以降にも俳諧では「花より団子」を詠んだ句が数多く見受けられるが、本稿では初期俳諧にみえる「花より団子」にとどめておく。

## (2) 狂歌

次に、狂歌においてどのように「花より団子」が詠みこまれているかを確認する。

狂歌における「花より団子」は『寒川入道筆記』(1613年)に「いたつらもの」として載せられている「花よりも団子の京トなりにけりけふもいしいしあすもいしいし」が初出である<sup>(8)</sup>。「かくれなき藤戸石を、上京細川殿御屋敷より室町畠山様御屋敷へ、信長公御引なさるゝ。数日御手間入れけれハ」とストーリーが書かれている。同じものが安楽庵策伝の笑話集『醒睡笑』(1628年、静嘉堂文庫版)の「落書」に「花よりもだごの京とそ成にけりけふもいしいしあすもいしいし」と採録されている<sup>(9)</sup>。詞書には「信長公始て京都に石垣の普請被仰付毎日石を引音喧しかりければ」とある。花は足利将軍家、団子は織田信長をさし、京都の支配権が足利

將軍家から織田信長に移ったことを皮肉った狂歌である<sup>(10)</sup>。

以上の狂歌は政権の有り様を風刺した歌であり、特殊な例であるといえる。その他の近世期の「花より団子」を詠んだ狂歌を整理すると、サクラを詠んだものとツツジを詠んだもの大きく二系統があることを指摘できる。それぞれの例を挙げながら説明を加える。

### ①サクラを詠んだ狂歌

まず、「花より団子」の花がサクラを指している狂歌を挙げる。

貞徳の『貞徳百首狂歌』（1636年）には「花よりもくすたんこをや思ふらんよしの、おくにあさる山賤」が採録されている<sup>(11)</sup>。「桜」が詠題となっており、ここでの花はサクラで、団子は吉野の葛団子をさしている。同様の例として、石田未徳の『吾吟我集』巻第一（1649年以後すぐか）には「仏にも彼岸桜の花よりは団子とおもふたむけなるへし」が採録されている<sup>(12)</sup>。ここでの花は彼岸桜、団子は彼岸団子である。唐衣橘洲撰の『狂歌若菜集』（1783年）には「下戸ならぬこそ男なれ山桜なとか団子を花に替えき」が収録されている<sup>(13)</sup>。ここでの花はヤマザクラで、団子は花見団子である。四方山人撰の『徳和哥後万載集』（1785年）には「花よりは団子ちいさく見えにけり小米さくらもあたえ千金」が収録されている<sup>(14)</sup>。ここではコゴメサクラの花が団子より優れていることを詠んでいる。米より団子の方が上等であるという価値観が歌の背景にある。

### ②ツツジを詠んだ狂歌

サクラと並んで多く見られるのはツツジを「花より団子」の花として詠んでいる狂歌である。

黒田月洞軒の詠草書留である『大団』（1688年から1703年）には、「この比は歌もいはでのつゝじもち花より何より碁をあんじ見て」が採録されている<sup>(15)</sup>。詞書には「玄蕃方へつゝじ送とて」とある。団子は登場しないが、「花より団子」を踏まえて詠まれた歌で、ここでの花はツツジである。同じく九如館鈍水の『興太郎』（1756年）には、「名にめて、賞翫せいや餅つゝし花より団子といふからはなを」と鈍永の歌が採録されている<sup>(16)</sup>。『犬子集』の句で「だんごよりましたる花かもちつゝじ」と詠まれていたように、この歌の背景には団子より餅が優れているという感覚があり、「花より団子というのだから、その団子より優れた餅の字を

冠した名前のモチツツジを賞翫すべきである」という歌意だととれる。「からはなを」は「唐花」と「いふから花を（賞翫せいや）」と掛かっている。花より団子とモチツツジが合わせて詠まれる背景には以上のような「団子より餅が優れている」という価値観が存在していることを指摘しておく。

ところで、葉流軒河丸・一文舎錢丸撰の『狂歌浦の見わたし』（1812年）には「八か日の花はまたきに家毎にさくらはちのとはな高うする」と本丸の歌が収録されている<sup>(17)</sup>。詠題は「家々賞花」で、上の句は卯月八日の竿花が家毎に立てられることを詠んでおり、下の句ではサクラの花見を詠んでいる。「はな高うする」は竿花を高く立てることと、鼻を高くすることが掛けられており、「ち」は東風が吹いてサクラの花が咲く様子と江戸風であることを掛けてのものであろう。江戸のサクラの花見と上方のツツジの花立てを比較して、八か日（卯月八日）にツツジの竿花が家々に立ち並ぶ見事さは鼻高々であるという歌意である。以上のように、卯月八日を詠んだ狂歌においては「花」といえばツツジをさすといえよう。

法橋契因の『狂歌活玉集』（1740年）には、「卯月八日花より団子と申事は喰ふに出るのいはれなるらん」と可由の歌が採録されている<sup>(18)</sup>。この狂歌からは「卯月八日花より団子申事は」というように「花より団子」が卯月八日に伝承されていることを明確に伝えている。同様に「花より団子」と卯月八日の関連性がうかがえる狂歌として、九如館鈍水の『朋ちから』（1753年）の「花よりもたんこよりもたよい物を給はりけりな卯月やうかん」<sup>(19)</sup>、田中其翁撰の『狂歌やまと拾遺』（1778年）の「花つみに尻をひねれはたんこほとはれて卯月の八日なりけり」（詠題は「仏生会」）<sup>(20)</sup>、宣果亭朝省ら撰の『狂歌栗葉集』（1797年）の「産湯しやの花の団子のせわしかる釈迦御誕生まやふにんにて」（「産湯しや」の産湯は灌仏会の「甘茶」のことで、産湯しやとは「花御堂」のことをいい、「まやふにん」は釈迦の生母の摩耶夫人のことである。花御堂を飾った花と「花より団子」が掛かっており、卯月八日の灌仏会の様子を詠んでいる）<sup>(21)</sup>、橙果亭天地根・清果亭桂影撰の『狂歌新後三栗集』（1819年）の「仏ても喰はねはたゝぬ世なりとや花より団子まさるとはいふ」（釈迦が誕生の際に立ち上がって天と地を指さして「天上天下唯我独尊」と言葉を発したという伝承に「花より団子」を掛けて、「仏ても喰はねはたゝぬ世」といって当時の現実主義的な世相を皮肉っている）<sup>(22)</sup>が挙げられる。

### ③サクラ・ツツジ以外を詠んだ狂歌

「花より団子」をサクラやツツジの花見以外の情景で詠んだもの、具体的な情景が不明であるものを年代順に挙げる。

狂歌がまとめられた『かさね草紙』（1644年写し）には伊勢山田に前野とのという人が餅屋に餅を一重送られて喜んで「世の中は花よりたこと聞なれば歌に餅はいやまさりけり」と詠んだ歌が採録されている<sup>(23)</sup>。「世の中は」とあるように、この頃には「花より団子」という成句が広く伝わっていたことがわかる。

生白庵行風の『古今夷曲集』（1666年）には、「花よりも団子を数の題ならばくはずと腹にあちはいつへし」と昌治の歌が採録されている<sup>(24)</sup>。

永日庵其律撰の『狂歌秋の花』（1746年序文）には「花よりも団子といへは一しほに賞玩すへき秋の望月」<sup>(25)</sup>、「涅槃会」が詠題の「春霞たつを見捨て御入滅の釈迦は花より団子と悟つた」<sup>(26)</sup>がある。これらの狂歌からは「花より団子」が卯月八日以外にも秋の月見や涅槃会でも伝えられていたことがわかる。

九如館鈍水の『興太郎』（1756年）には「くらへ来し花に団子は白雲の月社のほれいも見さるまに」と鈍全翁の歌が採録されている<sup>(27)</sup>。詞書によれば、名月の夜に芋団子を月に供えたが花は団子に負けるというのだから芋は月に勝つと戯れて詠んだのだという。ここでも『狂歌秋の花』の歌と同様に月見において「花より団子」が言及されていたことがわかる。さらに、「ほつとりの当世風味は花よりも日本一のみみ団子なり」と義直の歌が採録されている<sup>(28)</sup>。これは焼き鳥の黄身の串と串団子を掛けたものであろう。

三休斎白掬撰の『狂歌気のくすり』（1770年）には「花よりも団子といえと弁当も入相の鐘もわすれてそ見る」と稲士の歌が収録されている<sup>(29)</sup>。詠題は「花見」だが、何の花見を指すかは明らかでない。

### (3) 小括

俳諧と狂歌にみえる「花より団子」の例を整理すると、『犬子集』などの1600年代成立・刊行の撰集で多くの用例が確認できること、『せわ焼草』への俳語としての採録、彼岸や吉野の花見、千団子、月見などの様々な場面で「花より団子」が詠まれていたことから、1600年代には「花より団子」の成句が民間に定着していたと考えられる。

特筆すべきは、「花より団子」の俳諧や狂歌にはツツジが多く詠まれていること

である。また、『狂歌活玉集』『朋ちから』『狂歌やまと拾遺』『狂歌浦の見わたし』では明確に「卯月八日」と詠まれ、卯月八日に「花より団子」という成句が伝わっていたことがわかる。そのために『狂歌栗葉集』や『狂歌新後三栗集』では卯月八日の灌仏会の場面で「花より団子」が詠まれたといえる。

## 2、かるたにみる「花より団子」とその解釈

俳諧や狂歌からは「花より団子」が卯月八日やツツジの花と強く関連していることがわかったが、一方でどのような経緯で前掲の『小学館 ことわざを知る辞典』で述べられていたようなサクラの花見による「花より団子」理解が定着したのであろうか。俳諧や狂歌にも「花より団子」でサクラを詠んでいる例はあったが、これまでの花見研究の中でしばしば指摘されてきたように、民間に広くサクラの花見文化が浸透したのは1600年代後半以降になってからである<sup>(30)</sup>。民衆による群生のサクラの下での行楽行事としての花見文化の成立以降、どのように「花より団子」理解がなされていったのかをいろはかるたに描かれた図像やいろはかるたの流行と並行して刊行されたことわざ関連書籍での記述から考察する。

### (1) いろはかるたに描かれた「花より団子」

江戸いろはかるたの「は」の札は「花より団子」であり、取り札として図像化されてきた。冒頭で述べたように、現代のカルタではサクラと花見団子を描いたものがポピュラーだといえるが、図像の変遷について触れておきたい。

時田昌瑞は『岩波いろはカルタ辞典』の中で、カルタの札となっていることわざ類について図像を添えながら説明している<sup>(31)</sup>。時田は、「花より団子」の図像を①花と団子と人を描くもの、②団子と看板だけのもの、③花と団子、もしくは花と看板が併置されるもの、④看板か団子だけのもの。擬人化したものや花を女に見立てたものもある、と大きく4分類している。

①について、時田は江戸中期のたとえ系の「たとえ五十句かるた」の札を載せている。この図像には団子の店の前で坊主の男性が串団子を持ってサクラの花を眺めており、縁台の上には串団子が並べられている様子が描かれている。②には明治時代の江戸系の札を載せている。行燈状の看板には串団子の絵と「大だんご」の文字が書かれ、傍らに団子が入った盆が添えられている。③には明治から

大正頃の江戸系の札を載せている。サクラの花の下に皿に載せられた串団子が描かれている。④には昭和初期の江戸系の札が載せている。鼻から下のない女性の面と湯呑茶碗、皿に載せられた団子が描かれている。

また、細部の描写にはなるが、吉海直人によれば、団子の図像は古くは一串5個が一般的だったが宝暦(1751年)以降4個になり、「だんご3兄弟」の歌が流行ってからは3個になっているものが増えていることを指摘している<sup>(32)</sup>。

これらのようなことわざを主題にした「警合せかるた」は江戸時代中期に大いに流行し、江戸時代後期になるとこれらをいろは順に整理した「いろは警合せかるた」が人気を得た。これらの「警合せかるた」「いろは警合せかるた」は当初は関西で流行し、江戸に流行が広まったもので、江戸では文化年間(1804年から1818年)制作とされる「北斎のいろはたとえ」が広く支持されて版を重ね、定型となった。「北斎のいろはたとえ」には「花より団子」が登場し、以後「は」の札として江戸で定着したと考えられている。

明治に入ると、「いろはかるた」類は全体的に衰退していたが、子ども向けの「いろは警えかるた」だけは人気を維持しており、「いろはかるた」は子どものものと観念されるようになった。同時に明治20年代後半には学校教育の整備に添って子どもの玩具に「教育」という修飾語をつけることが流行し、かるたも「教育玩具」となり、子どもの玩具としてのイメージがさらに高まった。以降、出版業の中心が東京に移り、東京の出版社から発行されるものが増加したことから、東京風の「犬棒かるた」(花より団子が含まれる)が上方のものに比べて圧倒的に優勢になっていった。昭和前期以降は都市型の近代的な「いろはかるた」が盛んになった。これは伝統的な「いろは警えかるた」とは異なるもので、流行物やキャラクターが描かれるなどした<sup>(33)</sup>。

以上のような歴史的経緯を踏まえると、時田の示した②の団子屋の看板を描いたもの<sup>(34)</sup>から次第にサクラの花を傍らに描いたもの(③④)へと移り変わっていったことがわかる。

## (2) ことわざ関連書籍での「花より団子」

明治時代後半から昭和前期にかけて、子どもの中で「いろはかるた」が流行することによって、札に書かれたことわざを物語化して解説する書籍が多数出版された。同時に辞典類の刊行も進んでいく。ここでは、明治から昭和初期にかけて

のことわざ辞典やことわざ解説本でどのように「花より団子」が説明されているかを確認する。

### ①辞典類での説明

まず、ことわざ辞典類で「花より団子」がどのように説明されているかを挙げる。

千河岸貫一編の『俗諺辞林』(1901年)では、「花を観るよりも、団子を食ふがよいといふ、虚栄をすて、実益を取るの主義」と説明している<sup>(35)</sup>。同様に畠山健編の『作文新辞林』(1905年)では「花を見るよりも団子を食ふが甘しとの譬にや」とあり<sup>(36)</sup>、科学教育叢書刊行会編纂部編の『格言俚諺辞典』(1917年初版)でも「虚栄よりも実利をとれとの意」としている<sup>(37)</sup>。これらでの定義は現代の辞典類に記載されている見解と同様である。

### ②ことわざ解説本での説明

いろはかるたの流行に伴い、いろはかるたのことわざを物語として説明するという形式の書籍が多数出版された。川田孝吉編の『いろは短歌教育はなし』(1890年)では、

花は其のさま麗はしく人の愛を受るものなれども時に風雨の障ありて永く栄華を保つこと能はず団子は其形ち見悪けれども口腹に入りて能く人の飢を救ふ。人の上に於ても亦同じ一時の富をもつて外貌を飾ればとて身に教育のなきときは永く栄華を保つこと能はず外貌は見悪くとも身に知識を備へたるものは長く人に尊敬せられて終に名声を天下に挙ぐべし(中略)然れば何れを取らんかと云へば内を飾るかたに如くはなしと思はるゝなり<sup>(38)</sup>

と書かれている。ここでの説明は辞典類とは異なっていて、たとえ外見にこだわったとしてもやがては衰えるものなのだから意味がない、中身(教育・知識)を重視すべきだということを説いている。書名に「教育」とついていることからわかるように、教訓を含みながらの説明となっている。

続いて、錦織学堂編の『規箴』(1899年)では「花より糕」を「花は形容なり糕は食して功あり、故に花より糕を貴しとす、至竟、外飾よりは実用を主とせよとなり」と説明している<sup>(39)</sup>。福田琴月の『いろは短歌お伽噺』(1900年)に至っては、「花より団子と只一寸聞くと不風流のやうで御座いますが、畢竟、絹布よりは木

綿衣物の方が、温暖で身体の為にも宜いといふ、贅沢の人へのお小言です」と、風流より実用性をとるという説明である<sup>(40)</sup>。

大正期に入って、藤川義雄の『いろはかるたお伽四十八番』(1916年)では、「花は観るよりも団子を食べるが増し、外見よりも実益が優るものだと云ふ諺です」と説明している<sup>(41)</sup>。細川謙二の『俚諺読本』(1936年)においても「風流よりは実利の方がよいといふたとへです」とある<sup>(42)</sup>。これは明らかに前掲の辞典類の説明を引用しているもので、「花より団子」の意味において「実益」「実利」という言葉が使われ始めている。こうした書籍の出版にあたり、辞書類の説明が参考にされたことがわかる。

なお、『俚諺読本』ではことわざの「使ひ方」と「味ひ方」を次のように示している。

【使ひ方】堤に並んでゐる桜の列——白く開いた桜の上に、春の霞がぼうつとかゝつてゐる。

「きれいだね、もつと歩かうよ。」

「いや、僕たちは花より団子だよ、座れ座れ——さあ始めよう。」気の早いのがあせつている。

【味ひ方】花見をする風流よりは、団子を食ふ方がよい、酒をのむ方がよいといふのです。

精神的のことよりは物質的のことが先であるといふ人の心持をいつたのです。<sup>(43)</sup>

以上のような例示と解説は「花より団子」が行楽行事としてのサクラの花見観によって理解されていたことを示している。一方で、『修身実話新篇教育』3篇(1890年)は次のように「花より団子」を解説している。

昔は旧暦の四月八日に躑躅の花を竿の端に縛り付けて立てまして此日に団子を食べましたが其時分に子供が卯月八日に花より団子と言ました、此事を祖父さんに聞まして私が思ひますには今の時節は花より団子といふ事を目的にして勉強をしませんければなりません昔は風流だとか風雅だとか申して此様事を上品など申して日々入用の肝腎の事を知るのを劣等と申したさうです花などは幾ら美しくても喰て腹は大きくなりませぬ団子は実に為になります乃で何でも目前為になる事にかゝらなきやなりませぬ<sup>(44)</sup>

この書籍は大阪市西成郡の篠田正作によるもので、奥付によれば発行者・印刷者・発売所とも大阪市内に所在している。また、口語で書かれ、漢字にはルビを

振っており、劣等を「あかん」と読んでいることから、大阪の子ども向けに発行されたものとわかる。卯月八日のツツジの竿花を立て団子を食べ「卯月八日に花より団子」と言った情景が描かれ、俳諧や狂歌の例と同様に大阪では「花より団子」を卯月八日習俗で理解していたことがわかる。

### (3) 小括

いろはかるたや辞典類、ことわざ解説本からは「花より団子」の花はサクラで団子は花見団子であるというイメージが次第に定着していったことがわかる。いろはかるたでは団子屋の看板が描かれていたものに次第にサクラの枝や木が描かれるようになっていく。明治時代後期から昭和初期にかけての刊行物における「花より団子」の説明は、辞典類の刊行により「実益」「実利」という言葉が使われるようになるなど細かな表現の差異こそ認められるものの、概ね共通しており、行楽行事としてのサクラの花見観によって「花より団子」が理解されていたといえる。

「花より団子」をサクラとの関連で説明するようになった要因は、江戸や東京には「花より団子」をツツジとの関連で説明する文化的なりアリティがなかったからだといえる。近世期の江戸や現代の東京周辺の卯月八日の民俗事象では、ツツジの竿花を立てるといふ伝承は確認できない。一方で、上野東叡山や飛鳥山、隅田川堤をはじめとしたサクラの名所が成立したことによって、江戸では民衆の行楽行事としてのサクラの花見が定着していった。江戸ではそのような文化的背景のもとで、「いろはかるた」の「花より団子」の札にサクラや花見団子が描かれていった。そして、近代以降は東京の出版社が「いろはかるた」を刊行し、その流行に合わせてことわざ辞典類や解説本が刊行されたため、サクラの花見観による「花より団子」理解が一般化していったといえる。

## 3、卯月八日習俗と「花より団子」

俳諧や狂歌では「花より団子」と卯月八日やツツジとの関連性が認められたが、いろはかるたや辞典類、解説本ではサクラとの関連で成句が説明される例が多い。しかし、このサクラの花見観による「花より団子」理解は不十分であるといえる。なぜなら、サクラの花見が民衆に定着する以前の時代の俳諧や狂歌に「花

より団子」という成句が認められ、しかも卯月八日やツツジが詠み込まれているからである。さらに、大阪で発行された『修身実話新篇教育』では「花より団子」が卯月八日習俗に関連して説明された。

ここでは、現代の民俗事象のうち、卯月八日に「花より団子」という俚諺を伝承している事例を挙げながら、「花より団子」という成句の意味するところをツツジの花見観から再考する。

日本各地の卯月八日の事例1397例のうち、「花より団子」という成句を伝えている事例は39例ある。具体的には、伊豆大島、福井県若狭地方、滋賀県、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、岡山県東部、香川県に分布している。ほとんどの事例が近畿地方とその周辺で伝承されており、これは卯月八日にツツジの竿花を立てる地域と重複している<sup>(45)</sup>。これらの事例は伝承地の人々が卯月八日をどのように理解しているかによって大きく2つに分類することができる。

### (1) 死者供養の日

兵庫県・京都府丹波地方・福井県若狭地方・大阪府・和歌山県・鳥取県・岡山県東部・香川県・伊豆大島では、卯月八日に死者供養の習俗を伝承している。具体的な事例を挙げながら、これらの地域における「花より団子」の意味するところを考察する。

#### ①若狭地方

まず、若狭地方での伝承を挙げる。福井県若狭町旧上中町仮屋では、卯月八日に「ヤマツツジ・松・コゴメバナ・ススキ」を採ってきて竿花を立て、「家の仏壇にも花を立て、ダンゴを供え、「花よりダンゴ」と言っている」という<sup>(46)</sup>。竿花に立てた花と同じ花(ヤマツツジとコゴメバナ)を仏壇に供えている。また、高浜町和田浜では「卯月八日は花より団子」家々には皆団子をこしらえ仏壇や墓前に手向け、年寄連はお寺に詣でて甘茶をよばれ念仏唱名をなす」といい、ツツジ・フジ・ススキを竿花として立てている<sup>(47)</sup>。

若狭地方では卯月八日に5種類ないしは7種類の植物を竿花として立て、京都府舞鶴市の青葉山松尾寺に参って死者供養を行うのが特徴で、ほとんどの地域ではヤマツツジを掲げており、「花より団子」の花はヤマツツジで死者への供花、団子は仏壇や墓前に供える死者への供物であるといえる<sup>(48)</sup>。

## ②兵庫県

次に兵庫県の伝承を挙げる。兵庫県加古川市神野町石守では、「天花を立てる。竿の先に、みやまつつじ、しゃしゃきなどを結びつけ、高さを競うように立てる。「うづきようかは花より団子」といい、小麦粉でだんごをこしらえ、高い山などへ遊びに行き、弁当をつかう」という<sup>(49)</sup>。三田市山田では、「オヅキヨウカは花より団子」といって、蓬団子に凹をつけたヒッチギリとかヒョットコダングともいう団子を作り神棚に供え、仏壇にはあんを入れたハサミダングともいう普通の蓬団子を黄粉の上に並べたものを供えた。なおこの日には寺で花施餓鬼が行われるので、この団子を供え寺から甘茶をもらって帰る」といい、竿花として「石楠花・アカバナ・檜・モチバナ」を、各家の墓にも「ハナ」を立てるといふ<sup>(50)</sup>。また、丹波市旧山南町岡本・金屋では「この日、「花より団子」といって団子をつくる。オハギを作る家もある。またナナイロのオヒタシといって、セリ・ホウレンソウ・チシャ・ミツバ・ヨメナにフキや竹の子を加え、味噌もしくは醤油味にする。中々美味しいもので一口で食べてしまったという。またこのオヒタシは薬になるという。このオヒタシと団子は晩方に仏壇だけに供え、家族も晩食時に全員食べるものだとされている」といい、竿花として「ハナ(シキビ・シャクナゲ・アカバナ=ツツジのこと)」を立てる<sup>(51)</sup>。同様に神崎郡神河町長谷では、「俗に“卯月八日は花より団子”(卯月八日は花折れ団子)と言われる様に石楠花、つつじの花を二日前に折り来り、当日はその花に檜を添えて仏壇に供へ、又別に十尺位の竹の先に花を結び付け、表の庭の適当な所に立て、その根元にも花を挿し、湯茶をそ、いで供養する」といい、「当日、仏に団子を供へ他に七種の山菜、野菜類を煮て供える」といふ<sup>(52)</sup>。

兵庫県では卯月八日に山にある寺に参詣して死者供養を行い、家では七種類の精進料理や団子を作って仏壇に供え、赤いヤマツツジが竿花に立てられており、若狭地方と同様に「花より団子」の花はヤマツツジで死者への供花、団子は死者への供物であるといえる<sup>(53)</sup>。

## ③その他の地域

若狭地方や兵庫県では卯月八日の死者供養の習俗が盛んに行われているが、それ以外の地域でも仏壇や神棚、墓へ花や供物を供える事例が散在している。和歌山県橋本市では、「仏壇には柏餅や餡の入った団子を供え、花より団子といっ

団子を食べる」といい、ツツジとウノハナを竿花に立てている<sup>(54)</sup>。かつらぎ町旧花園村でも「榕、藤、芍薬、椿、ウツギ」を竿花として立て、「オツキ八日は花より団子」といってボタモチを神仏に供えている<sup>(55)</sup>。古座川町ではウノハナを墓に挿し、般若心経の転読が行われ、「卯月八日は花より団子」という言葉が残っているという<sup>(56)</sup>。鳥取県岩美町旧小田村では、「卯月八日は花より団子ということわざがあり、おはぎ、つき餅、赤飯なんでもよいから餅をつくり青い物をそえてシンジン(神棚)に供える。卯の花を仏壇にあげる」といい、ウツギの花を戸口に立てる<sup>(57)</sup>。岡山県奈義町滝本では「花より団子」といって、柏餅をつくっていたといい、タカバナといって赤いツツジを立てる<sup>(58)</sup>。香川県丸亀市手島では「ウヅキヨウカは花より団子」と言っ米の粉の団子を作って食べた」といい、テントバナといってシュンギクとツツジを立てる<sup>(59)</sup>。観音寺市伊吹島地区では「花より団子」と言っ団子を作り、仏壇に供える」という<sup>(60)</sup>。東京都大島町岡田では「四月八日は花より団子」といって、山から卯木の花を採って来て、仏様へ団子とともに上げた」という<sup>(61)</sup>。

これらの地域では、「花より団子」の花はツツジないしはウツギ(伊豆大島、和歌山県、鳥取県)で死者に供える花、団子(事例ではボタモチや柏餅などもある)は死者への供物であるといえる。

## (2) 月に祈る日

奈良県・大阪府・滋賀県湖南地方・三重県伊賀地方では、卯月八日をオツキヨウカといっ、月に供え物をして様々なことを祈る習俗が伝承されている。同様に考察していく。

まず、滋賀県東近江市旧八日市市では山からツツジ(モチツツジ)などの花を採ってきて竿花を立て、月や天道に供えるといっ、「オツキヨウカは花より団子」といっ、米の粉で作った丸い団子を食べる」といっ<sup>(62)</sup>。次に、大阪府茨木市では「山にモチツツジを取りに行き、竿の先に十文字にくくりつけ、門に立てた。「オツキヨウカ、花より団子」と言っ、夕方にお月さんに供えるといっ竿の元に団子を供え、一晚祀った」といっ<sup>(63)</sup>。同様の習俗は寝屋川市や羽曳野市、大阪狭山市でも見られるが、大阪府下の伝承では竿花を月に供える地域と太陽に供える地域が併存している<sup>(64)</sup>。その他、「花より団子」といっ花や団子を月に供える伝承は、奈良県奈良市、大淀町、十津川村にも確認できる。竿花の花はヤマ

ツツジではなく「モチツツジ」としているのが特徴である。

以上のほか、団子を月ではなく「三本脚の蛙」に供えるという事例が確認できる。たとえば、滋賀県甲賀市信楽町多羅尾では、フジ・ツツジ・サツキを竿花に立て、「おつき八日の花より団子」といって竿花にくくりつけた籠に蓬団子を入れて月に供え、翌朝三本脚の蛙が入っているとよいという<sup>(65)</sup>。京都府南山城村や、奈良市でも「花より団子」といって三本脚の蛙に団子を供えている。三本脚の蛙は月娥のことであろうが、これについては月に関連する卯月八日の伝承として別稿で詳しく述べたい。

### (3) 小括

卯月八日の「花より団子」の伝承について次表のように整理できる。

死者供養の日	卯月八日理解	月に祈る日
兵庫県・京都府丹波地方・福井県若狭地方・大阪府・和歌山県・鳥取県・岡山県東部・香川県・伊豆大島	地域	奈良県・大阪府・滋賀県湖南地方・三重県伊賀地方
ヤマツツジ(赤い花)／ウツギ=死者への供花	花	モチツツジ=月への供花
死者への供物	団子	月・三本脚の蛙への供物

卯月八日を死者供養の日と理解している地域では、「花より団子」の花はヤマツツジ(ウツギ)で死者への供花、団子は死者への供物である。

一方、卯月八日を月に祈る日と理解している地域では、「花より団子」の花はモチツツジで月への供花、団子は月あるいは三本脚の蛙への供物である。

卯月八日に伝わる「花より団子」の花とはツツジを、団子とは死者や月への供物を意味している。ことわざ辞典類での説明のように、「花より団子」の花はサクラで団子は花見団子であるという説明は卯月八日においては不適切である。

また、辞典類の「花より団子」は「見た目や品位よりも実質や実利を重視する」という意味であると説明しているが、卯月八日に死者供養を行う地域では、卯月八日の花(ヤマツツジなどの赤い花を竿花として立てたり仏壇や墓にも供えたりする習俗)と団子(精進料理や団子などの特別な食物を作って仏壇に供えたり、野山で食べたりする習俗)はどちらも重要視され<sup>(66)</sup>、団子が優れていて花が劣るという価値観は認められない。卯月八日に月に祈る地域においては、竿花の下に

台を設けたり、竿花に籠を吊るしたりすることによって団子を供えることができるようになる。どちらかが欠けては月への祈りは成立しないため、団子と花の間に優劣は存在しないといえよう。

卯月八日の「花より団子」は、卯月八日に花を立てる習俗が何を目的に行われるかわからない状況下<sup>(67)</sup>で、「〈何のために卯月八日に立てるのかわからない花よりも食べるのできる団子のほうがいい〉とは言うけれど、どちらも大切なことなのだからしっかり取り組まなければならない」という戒めの意味を含みながら<sup>(68)</sup>、伝承の現場では「花」も「団子」も大切にされる。「花」あるいは「団子」がどちらかでも欠けてしまえば、卯月八日習俗の目的が達成できないからである。

## おわりに

本稿では、まず俳諧や狂歌の「花より団子」の用例を挙げ、1600年代には「花より団子」の成句が民間に定着していたこと、「花より団子」の句や歌にツツジが多く詠まれ、卯月八日にこの成句が伝わっていたことを明らかにした。

つづいて、いろはかるたや辞典類、ことわざ解説本の整理からは、「花より団子」の花はサクラで団子は花見団子であるというサクラの花見観による「花より団子」のイメージが次第に定着していったことを指摘した。このような「花より団子」イメージが生まれたのは、「いろはかるた」の札として「花より団子」が定着し、その成句を説明するための辞典類や解説本が刊行されたのが江戸や東京であったのが大きな要因であると考えられる。江戸東京では卯月八日にツツジを用いた竿花などの伝承を確認することはできず、習俗のリアリティがないために、卯月八日のツツジの花見観ではなくて行楽行事としてのサクラの花見観でこの成句を説明せざるを得なかったのである。

そして、卯月八日に「花より団子」の成句を伝えている民俗資料の整理からは、卯月八日に伝わる「花より団子」の花はツツジを、団子とは死者や月への供物を意味していることを明らかにし、ことわざ辞典などの「花より団子」の花はサクラで団子は花見団子であるという説明が不適切であることを指摘した。また、「見た目や品位よりも実質や実利を重視する」という事例は確認できず、卯月八日の「花より団子」には「花」の習俗も「団子」の習俗もしっかり取り組まねばならないという戒めの意味で使われている実態を明らかにした。

ここでいうツツジの花見観について筆者の考えを提示しておきたい。まず、ツツジの花見観とは、農山村を中心とする死者供養の花見としての性格を持つ。これは、都市近郊の行楽行事としての性格が強いサクラの花見観とは大きく異なる花見観である。このツツジの花見の目的は、死者と同じ時空を過ごすことである。卯月八日には、死んで間もない死者の靈魂が卯月八日に小高い山や寺のある山にやってくる<sup>(69)</sup>。この死者霊と同じ時空で過ごそうというのが卯月八日の花見である。

以上のように、ツツジの花見観によって「花より団子」を説明することによって、『新撰犬筑波集』の「花よりもだんごとたれかいはつゝじ」の理解をさらに深めることができる。この句を直訳すれば、「花よりも団子となんて誰かは絶対に言わない」ということになるが、これだけでは句の心意は伝わってこない。兵庫県や若狭地方などの死者供養の伝承を踏まえれば、小川が指摘したようにこの「たれか」は先祖や新仏などの死者霊だといえる。そして、花はツツジのことをさして「いはつゝじ」と掛かっており、花と団子は死者への供物で「たれか」(死者霊)がそれを受け取るのである。また、「いはつゝじ」は「いはじ」とも掛かっており、この句は非常に技巧的である。前述のような戒めの意味を含めれば、「世間では花より団子と言っているけれど、死者霊はそんなことを絶対に言わないぞ」という意味にとれる。死者霊がなぜ言わないのかというのは、前述のように卯月八日の死者供養においては花と団子の習俗がどちらも重要視されているのであり、どちらかが欠けては死者供養の目的が達成できない(死者霊からみればきちんと供養されたことにならない)ためである。

こうした句の理解は、サクラの花見観では到達できないものである。同様に、近畿地方を中心とした地域で卯月八日に伝わっている「花より団子」という俚諺についても、ツツジの花見観から理解していくことが有効である。

ツツジの花見観の論を深めるためには、ツツジが民話のなかでどのようなモチーフとして語られているかなど、日本人が持つツツジの文化的意義を明らかにしなければならないであろう。加えて、日本各地にはツツジの群落がみられる。こうしたツツジの名所は死者供養と関連して成立したのではないかという視点も含めてツツジと死との関連性を明らかにすることを今後の課題としたい。

注

- (1) 北村孝一編『小学館 ことわざを知る辞典』小学館、2018年11月12日、275頁
- (2) インターネットで「花より団子 イラスト」と検索すると、子どもや動物が三色団子を食べながら桜の花見を楽しんでいる様子を描いた絵が多く見受けられる。
- (3) 小川直之「「花より団子」の心意」『伝承文化研究』第6号、國學院大學伝承文化学会、2007年
- (4) 大野洒行編『芭蕉以前俳諧集』上巻、博文館、1897年10月26日、155頁所収
- (5) 『犬子集』の句は森川昭ら校注『新日本古典文学大系69 初期俳諧集』（岩波書店、1991年5月20日）に拠った。
- (6) 米谷巖編『せわ焼草』ゆまに書房、1976年3月29日、53頁所収
- (7) 赤羽学編『岡山大学国文学資料叢書 四 新続犬筑波集』ベネッセコーポレーション、1995年12月1日、160頁所収
- (8) 武藤禎夫・岡雅彦編『嘶本大系』第1巻、東京堂出版、1975年11月25日、24頁所収
- (9) 岩淵匡編『醒睡笑静嘉堂文庫蔵』本文編〔改訂版〕、笠間書院、2000年11月11日、16頁所収
- (10) これらの狂歌について漆崎正人は「『醒睡笑』所収笑話における「花よりも団子」の意味的重層性について」（『藤女子大学国文学雑誌』102号、藤女子大学日本語・日本文学会、2019年2月）で、花は「花の御所」で足利將軍家をさし、団子は団子好きの織田信長のことをさすのだという。また、いしいしは女房言葉で団子のことをいい、これが石とも掛かっている。
- (11) 狂歌大観刊行会編『狂歌大観』第1巻本篇、明治書院、1983年1月15日、133頁所収
- (12) 前掲(11) 152頁所収。生白庵行風による『古今夷曲集』（1666年）にも同作が認められる。
- (13) 江戸狂歌本選集刊行会『江戸狂歌本選集』第1巻、東京堂出版、1998年5月20日、202頁
- (14) 江戸狂歌本選集刊行会『江戸狂歌本選集』第2巻、東京堂出版、1998年8月30日、236頁
- (15) 前掲(11) 509頁所収
- (16) 西島孜哉・光井文華編『近世上方狂歌叢書』13、和泉書院、1990年2月28日、36頁所収
- (17) 西島孜哉・羽生紀子編『近世上方狂歌叢書』29、和泉書院、2002年3月30日、22頁所収
- (18) 前掲(11) 794頁所収
- (19) 前掲(16) 11頁所収
- (20) 西島孜哉・光井文華・羽生紀子編『近世上方狂歌叢書』20、和泉書院、1994年3月30日、78頁所収
- (21) 西島孜哉編『近世上方狂歌叢書』5、和泉書院、1986年5月30日、5頁所収
- (22) 西島孜哉編『近世上方狂歌叢書』9、和泉書院、1987年11月30日、36頁所収
- (23) 佐竹昭広編『京都大学国語国文学資料叢書三 かさね草紙 神宮文庫蔵』臨川書店、1977年12月10日、155頁所収
- (24) 前掲(11) 201頁所収
- (25) 西島孜哉編『近世上方狂歌叢書』3、和泉書院、1985年10月30日、8頁
- (26) 前掲(25) 16頁所収
- (27) 前掲(16) 26頁所収
- (28) 前掲(16) 42頁所収
- (29) 西島孜哉・光井文華・羽生紀子編『近世上方狂歌叢書』24、和泉書院、1997年1月30日、16頁所収
- (30) たとえば、芭蕉は『炭俵』（1694年頃）の中で「うへの、花見にまかり侍りしに、人々暮打ちさはぎ、もの、音、小うたの声さまごまなりにける」（白石佛三・上野洋三校注『新日本古典

文学大系70 芭蕉七部集』岩波書店、1990年3月、395,396頁所収）と書いており、和学者の戸田茂睡による『紫の一本』（1682年成立）でも上野東叡山での花見が盛況であった様子が書かれている。

- (31) 時田昌瑞『岩波いろはカルタ辞典』岩波書店、2004年11月、184～185頁
- (32) 吉海直人『「いろはかるた」の世界』新典社、2010年4月、143頁
- (33) かるたの歴史については前掲(31)(32)のほか、江橋崇『ものと人間の文化史173・かるた』（法政大学出版局、2015年11月）を参照した。
- (34) ①は江戸時代中期のものはこれ以外に見られない。一方、②と同様のデザインの札は文久元年（1861年、よし藤画、文正堂刊）と元治元年（1864年、国久画、新庄堂刊）に刊行されており、ある程度の定着が認められる（前掲(32)110～117頁を参照）。
- (35) 千河岸貫一『俗諺辞林』青木嵩山堂、1901年12月24日、26頁
- (36) 畠山健編『作文新辞林』郁文舎、1905年4月8日、692頁
- (37) 科学教育叢書刊行会編纂部編『格言俚諺辞典』宝文館、1917年11月2日（初版）、1933年10月15日（十版）、187頁
- (38) 川田孝吉編『いろは短歌教育はなし』いろは書房、1890年3月15日、21頁
- (39) 錦織学堂編『規箴』精華堂、1899年9月15日、35頁
- (40) 福田琴月『いろは短歌お伽噺』一、文禄堂書店、1900年8月10日、22頁
- (41) 藤川義雄『いろはかるたお伽四十八番』敬文館、1916年1月1日、14頁
- (42) 細川謙二『俚諺読本』厚生閣、1936年11月20日、223頁
- (43) 前掲(42)
- (44) 篠田正作『修身実話新篇教育』3篇、競争屋、1890年10月16日。なお、本書は1891年（『教育学術共進会』）と1892年（『修身実話少年教育』）にも版を重ねている。
- (45) 伊藤新之輔「卯月八日の竿花——天道花習俗の分布と伝承内容」『伝承文化研究』18号、國學院大學伝承文化学会、2021年6月、31～47頁
- (46) 永江秀雄『若狭の歴史と民俗』雄山閣、2012年9月10日、242頁
- (47) 和田地区委員会編『若狭和田郷土誌』和田文化推進協議会、1992年12月18日
- (48) 若狭地方の卯月八日については伊藤新之輔「若狭地方の松尾寺参り」『伝承文化研究』第16号、國學院大學伝承文化学会、2019年7月31日、38～51頁を参照。
- (49) 石見完次『東播磨の民俗 加古郡石守村の生活誌』神戸新聞出版センター、1984年9月25日、310・311頁
- (50) 三田市総務部市史編さん課編『三田市史』第9巻民俗編、三田市、2004年3月31日、271・273頁
- (51) 御影史学研究会『岡本・金屋の民俗——兵庫県氷上郡山南町——』御影史学研究会山南町民俗調査団、1988年10月1日、44・124頁
- (52) 坂本花恨『長谷習俗誌』（非売品）1981年5月5日、111・112頁
- (53) 兵庫県およびその周辺地域の卯月八日については伊藤新之輔「卯月八日の死者供養—兵庫県周辺地域を中心に」『國學院大學大学院紀要—文学研究科』第50輯、2020年2月、(45)～(64)を参照。
- (54) 橋本市史編さん委員会編『橋本市史』民俗編・文化財編、橋本市、2005年3月31日
- (55) 和歌山県教育委員会編『花園村の年中行事』1986年3月、17頁
- (56) 古座川町史編纂委員会編『古座川町史』民俗編、古座川町、2010年3月15日

- (57) 國學院大學民俗学研究会、昭和44年度『民俗探訪』40頁
- (58) 奈良町滝本の民俗編集委員会編『奈良町滝本の民俗』岡山民俗学会、平成23年8月31日、32頁
- (59) 香川県編『香川県史』第十四巻資料編民俗、香川県、1985年11月30日、513頁
- (60) 前掲(59) 670頁
- (61) 大島町史編さん委員会編『東京都大島町史』民俗編、大島町、1999年3月31日、183・201頁
- (62) 八日市市史編さん室編『八日市市の民俗』資料集Ⅲ、八日市市教育委員会、1986年3月31日
- (63) 茨木市史編さん委員会編『新修 茨木市史』第10巻 別編 民俗、茨木市、2005年11月30日、630・631頁
- (64) 前掲(45)で述べたように竿花を捧げる対象は地域や家単位で再解釈が行われている。これは団子を供える対象についても同様だといえ、同一の地域内でも異なる解釈が共存している。
- (65) 國學院大學民俗学研究会、昭和37年度『民俗探訪』64頁
- (66) 前掲(53)を参照。
- (67) 前掲(45)で述べたように、竿花を月や太陽、釈迦に捧げるという伝承は各地で習俗が再解釈された結果である。月に供えるという地域では卯月八日を「オツキヨウカ」と訛った名前で呼んでおり、「オツキ」だから月に供えるのだという理解がされていることに注意したい。たとえば、滋賀県甲賀市信楽町多羅尾では「オツキ八日をお月八日と解したためか、どこでもお月様にそなえるのだと考えている」(前掲(65))という。高島市旧今津町天増川では竿花を月に供えるということを「オツキヨウカなどともいうからであろうかもっとも古老の中には月ではなく、日だというものもある」(『江若国境の民俗』滋賀民俗学会、1967年5月31日、61頁)という。また、三重県伊賀市旧烏ヶ原村山菅では「オツキヨウカ」なので竿花(モチツツジ)はオツキサンに捧げるのだという(筆者調査、1938年生男性、2015年3月1日)。こうした再解釈が行われた背景には卯月八日の竿花が何のために立てられるのかわからないという状況があり、近世期の歴史資料からは各地で多様な解釈が行われていたことがわかる。
- (68) 和歌山県日高川町旧川辺町では、「『卯月八日に卯の花立てば親に再び会うた心』で拝め」といってウノハナとツツジの竿花を立てており(川辺町史編さん委員会編『川辺町史』第二巻通史編下、川辺町、1991年2月23日、927・928頁)、同様に奈良県十津川村上湯川寺垣内でも「おつきょうかに卯の花もちて親にふたたびあおうた心」といってウノハナの竿花を立て、月や釈迦に供えている(林宏「西川組探訪録(昭和34年8月)」『林宏 十津川郷探訪録』民俗1、十津川村教育委員会、1992年3月31日、26頁)。以上のように戒めの意味で「花より団子」以外の俚諺が伝わっている。
- (69) 卯月八日に山や山にある寺に死者霊がやってくるという伝承は若狭地方や兵庫庫などにみられるほか、群馬県の赤城山山麓の地域などでも確認できる。また、全国的に卯月八日に山で遊んだり花見をしたりする習俗が確認できる。卯月八日の死者供養の全容は別稿で詳細を述べたい。